

親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅳ：親の世話に対する態度の検討

西村 純一*, 井森 澄江**, 井上 俊哉***, 大井 京子****, 斉藤こずゑ*****

(平成 17 年 10 月 6 日受理)

Life-span Development Psychological Study of the Relationship of Parents and their Children IV: Examination of Attitudes Towards Care for Parents

NISHIMURA, Junichi IMORI, Sumie INOUE, Shunya
Ooi, Kyoko and SAITO, Kozue

(Received on October 6, 2005)

キーワード：生涯発達心理学的研究，親子関係，親の世話に対する態度，年代差

Key words : Life-span development psychological study ; the relationship of parents and their children; attitudes towards care for parents; generation gaps

菅谷・長山(1987)は、母娘関係における愛情は、父-娘、父-息子、母-息子よりも強いという結果を示している。近年、成人し独立した後の子とその親との関係が注目されており、特にもっとも密接なかかわりが予想される母娘を対象とした世代間の親密な関係やサポートの研究が行われている(春日井, 1997; 島谷, 1999; 北村・無藤, 2001; 水野-島谷, 2002)。

北村・無藤(2001)は、母娘関係が成人の娘の適応状態を規定する度合いを検証するとともに、娘の結婚や出産というライフイベントによって母娘関係がどのような発達の移行を経るのか探索的に調べるために、独身女性、既婚で子どもがいない女性、既婚で子どもがいる女性間で比較検討した。それによると、母親との親密性は独身の娘の心理的適応と関連していると同時に、既婚で無職の娘の心理的適応に対してもある程度の効果をもつという。また、ライフイベントによる成人期の母娘関係の発達の移行に関しては、独身あるいは有職の娘と比較して、既婚で無職の娘は、母親との親密性が高く、サポートを求める気持ちが強いことが見出されている。また、北村・

無藤(2002)は、世代による違い、娘の婚姻状態や子どもの有無による違いに注目しながら、成人の娘とその母親との間のサポートを検討した。サポートの種類に関わらず、お互いが健康であるうちは、娘の婚姻状態、子どもの有無などによって異なるが、親から子へといった方向でのサポートが主であることが示唆された。しかし、これらの研究では娘の年齢は27歳から34歳までに分布しており、平均年齢は29.2歳であった。したがって、35歳以上の娘については検討されていないが、35歳以上となってくると、母親の加齢にもなって娘による母親サポートが増加してくることが予想される。それゆえ、老いゆく親と娘との関係においては、子から親へのサポートの検討がより重要になってくると思われる。

高齢化が先鋭化するなか、こうした母娘を対象とした世代間サポートは老老介護問題まで含みうる。従来の日本では高齢女性の介護者としてイエ制度のもと、嫁が想定されていた。しかし、近年では高齢女性の介護者として娘が期待されるようになってきている(東京都生活文化局女性青少年部計画課, 1995)。娘が要介護者となるのは、2000年で34.4%に達し、嫁の25.4%をすでに上回っている(東京都生活文化局女性青少年部計画課, 1998; 東京都福祉局総務部計画調整課, 2001)。

島谷(1999)は、娘による母親介護に関して、高齢女性が娘に介護してもらうことを望む一方で、中年女性は母親の介護者となることに対して確信をもっておらず、

* 老年心理研究室

** 発達心理研究室

*** 教養部情報処理研究室

**** 文学部心理教育学科資料室

***** 國學院大学

中年女性と高齢女性とで娘による母親介護に対して認識が食い違っていることを明らかにしている。また、たとえば、娘による看取りが行われる場合には、イエ意識に基づく長男（の嫁）による看取りと違って、娘自身の自由な自発的な意志に負う部分が大きいため、その苦労は自己責任とみなされかねない面があるという（春日井, 1997）。水野-島谷（2002）は、日米で親子の親密性の構成が異なっており、日本の成人期母娘の親密性は対等性と異なる次元にあり、親子の分離など葛藤を通じて対等性を獲得していく米国の親子関係とは異なるという。今後、イエ意識が夫方家系から妻方家系の重視へとシフトしたとしても、従来の夫方家系の扶養-相続にみられるような親世代から子世代への援助を含めた親子間の双方向の援助というかたちをとるとは考えにくく、娘から母親への一方向の援助であるとしている。

本研究では、生涯発達の視点から成人女性の老いてくる親の世話に対する態度について検討する。すなわち、成人女性の老いてくる親の世話に対する態度の概念的構造を因子分析的に検討すると共に、20代から80代にわたる成人女性の親の世話に対する態度の年代差について検討する。さらに、自分の親や夫の親が一人で生活することが困難になった場合に、どのように世話をする考えでいるかということと、親の世話に対する態度との関連を検討する。

方 法

調査方法と分析対象 首都圏のA女子大学、短期大学（旧制高等専門学校を含む）を卒業した女性970名（20歳～92歳）を対象に質問紙郵送調査を行った。対象者は同窓会名簿からランダムにサンプリングされた。実施時期は、2004年10月～12月に実施された。女子大学同窓生4200名に質問紙調査票を郵送し、記入後返送を依頼した。全体の回収率は23%であったが、年代別にみると回収率は13%～35%まで変化した。おおむね年代の高い方が回収率はよかった。表1は年代別に配布数、調査対象者数、回収率を示したものである。

調査内容と分析内容 調査票はフェイスシートをはじめ、理想の生き方、実際の生き方、夫婦関係、現在の愛着（IWM尺度）、青年期の親への愛着（IPA）、親と自分との関係（娘性を含む）、老いてくる親への世話についての態度、自分自身や親の高齢化に伴う意識・生活に対する希望、生きがい、および自分自身の子育て行動・感情

表1 年代別対象者数（回収数）

年 代	配布数	回収数	回収率(%)
20代	800	101	13
30代	800	120	15
40代	700	153	22
50代	550	131	24
60代	550	186	34
70代	600	209	35
80代*	200	47	24
全体	4200	979	23

(*92歳1名含む) 欠測値32.

など、265項目からなる。このうち、本研究では、老いてくる親への世話に対する態度28項目（表2）について分析した。これらの項目は、岡林・杉澤・高梨・中谷・柴田（1999）が在宅障害高齢者の主介護者における対処方略の構造を検討する際に使用した16項目を中心に、独自に検討した12項目を加えたものである。各項目に対し、「全くあてはまらない」「あてはまらない」「どちらかというにあてはまらない」「どちらかというにあてはまる」「あてはまる」「非常によくあてはまる」の6段階で評定させ、それぞれ1点から6点の素点を与えて分析した。また、自分の年齢、自分の親や夫の親が一人で生活することが困難になった場合の対応の仕方について、「同居して世話をする」「既に同居している」「通いで世話をする」「人を雇って世話をしてもらう」「施設に入れて世話

表2 老いる親に対する世話についての質問項目

1	私は、親に頼られるのがうれしいと感じる
2	親に対してやさしく真心を込めて接する
3	親に頼まれたことは後回しにせずすぐに実行してあげる
4	とにかく精一杯頑張ってお世話する
5	私は、親のためならなんでもしたい（なんでもできる）
6	私は、自分のことより親のことを考えてしまう
7	意志の疎通を図り親の気持ちを尊重する
8	親の世話は私がしなくてはいけないと責任を感じる
9	私は、親が老いて病弱になったら親の世話をしてあげたい
10	私にとって、親の世話は生きがいである

表3 老いる親に対する世話の因子パターン

11	私は、親に苦勞をかけたので、親の老後は楽をさせてあげたいと思う
12	私は、実際に親の世話をすることになったとき、素直に受け入れることができる
13	親を大切にしたい気持ちと、実際に介護を要求されるとちょっと困る気持ちがある
14	自分自身、老いてくる親の世話をするのは、体力的にも経済的にもつらいと思う
15	できる範囲で無理をしないようにお世話をする
16	希望を捨てずに毎日を明るく過ごす
17	自分が倒れては困るので自分自身の健康管理に気をつける
18	友人と会ったり自分の好きなことをして気分転換をする
19	お世話に振り回されず意識的に自分自身の時間をもつ
20	お世話している人同士で励まし合う
21	お世話にまつわる苦勞や悩みを家族や周りの人に聞いてもらう
22	ひとりでもなんでもやろうとしないで家族やまわりに協力を頼む
23	役所や医師・看護師などの専門家に相談する
24	お世話に役立つ情報を集める
25	在宅サービスを積極的に利用する
26	親の状態が急変した場合に備えて対応策を立てる
27	精神的に親の支えになりたいが、病弱な親の世話は病院や施設にまかせたい
28	親の世話に際しては、介護サービスを利用したほうがよいと思う

項目	因子		
	積極的受容	社会的支援追求	マイペース
私は、親のためならなんでもしたい(なんでもできる)	.882	.022	-.048
とにかく精一杯頑張ってお世話をする	.867	-.032	.007
親に対してやさしく真心を込めて接する	.798	.029	.043
私は、自分のことより親のことを考えてしまう	.776	-.042	-.126
私にとって、親の世話は生きがいである	.744	-.073	-.118
親に頼まれたことは後回しにせずすぐに実行してあげる	.740	.011	.026
私は、実際に親の世話をすることになったとき、素直に受け入れることができる	.709	-.038	.056
意志の疎通を図り親の気持ちを尊重する	.696	.019	.079
私は、親が老いて病弱になったら親の世話をしたい	.679	-.009	.082
私は、親に頼られるのがうれしいと感じる	.670	.051	-.014
お世話に役立つ情報を集める	.071	.859	-.016
役所や医師・看護師などの専門家に相談する	.026	.837	-.008
在宅サービスを積極的に利用する	-.034	.801	-.075
ひとりでもなんでもやろうとしないで家族やまわりに協力を頼む	-.040	.550	.157
親の世話に関しては、介護サービスを利用したほうがよいと思う	-.105	.416	.047
友人と会ったり自分の好きなことをして気分転換をする	-.087	-.037	.817
お世話に振り回されず意識的に自分自身の時間をもつ	-.179	.024	.758
自分が倒れては困るので自分自身の健康管理に気をつける	.134	-.028	.690
希望を捨てずに毎日を明るく過ごす	.331	.051	.485
できる範囲で無理をしないようにお世話をする	.046	.091	.423

をしてもらう」の中から一つを選んでもらった。これと親の世話に対する態度の得点との関連を分析した。

結 果

1 親の世話に対する態度の因子構造

欠測値をリストワイズで除いて因子分析を行っているため、サンプルサイズはN=712になっている。因子分析の初期解には重みづけのない最小二乗法を用い、プロマックス回転を行った。スクリープロットから主要な因子は3因子と推定された。28項目を出発点として、負荷量の小さい項目や複数の因子に負荷の高い項目を除外し、最終的に20項目を選択した。得られた因子パターンは表3の通りである。

第1因子は、「私は、親のためならなんでもしたい、

(なんでもできる)」「とにかく精一杯頑張ってお世話を
する」「親に対してやさしく真心を込めて接する」などの
項目に負荷が高く、積極的受容の因子と命名した。第
2因子は、「お世話に役立つ情報を集める」「役所や医師・
看護師などの専門家に相談する」「在宅サービスを積極
的に利用する」などの項目に負荷が高く、社会的支援追
求の因子と命名した。第3因子は、「友人と会ったり自
分の好きなことをして気分転換をする」「お世話に振り
回されず意識的に自分自身の時間を持つ」「自分が倒れ
ては困るので自分自身の健康管理に気をつける」などの
項目に負荷が高く、マイペースの因子と命名した。

これら3因子の累積寄与率は59.87%に達している。
因子間相関は、積極的受容は社会的支援追求とは0.096、
マイペースとは0.120と概して低く、関係は薄いとみら
れる。他方、社会的支援追求とマイペースとの間には
0.526という高い相関があり、両者は互いに関連するこ
ろがあるとみられる。

2 親のお世話に対する態度の3尺度と年代差

因子負荷絶対値が最大の因子にもとづき尺度を構成す
るとき、積極的受容は10項目、社会的支援追求とマイペ
ースはそれぞれ5項目であった。各項目の素点を単純加算
したものを項目数で除した尺度得点を算出した。信頼性
係数は、親孝行至上主義 $\alpha = 0.926$ 、社会的支援追求 $\alpha =$
0.820、マイペース $\alpha = 0.764$ であった。マイペースがや
や低いものの十分分析に耐えるレベルである。

図1は、積極的受容の尺度得点の年代別平均値を示し
たものである。それによると、20代から40代までは低い

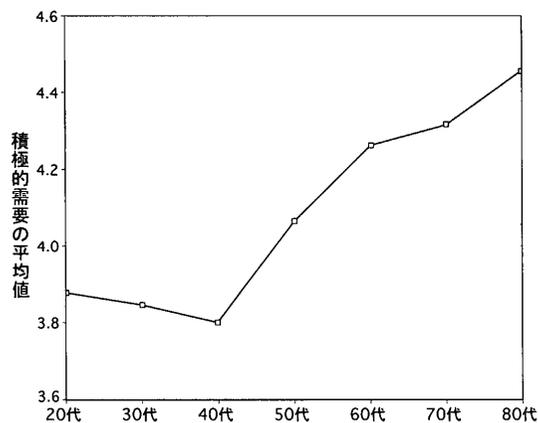


図1 積極的受容の年代差

状態で推移しているが、50代から上昇し、年代が高いほ
ど高い水準になっている。したがって、積極的受容の態
度は20代から40代くらいまでは低いが、50代以降、年
代があがるほど高くなる傾向があるといえよう。分散分析
の結果、年代差は0.1%水準で有意である ($f(6,774) =$
12.197, $p < 0.001$)。多重比較によると、40代以前と60
代以降との間には有意な差があるが、40代以前と50代、
あるいは50代と60代以降のとの間には有意な差は認めら
れない。したがって、40代以前と60代以降とは明らかに
年代的な違いがあるとみられるが、50代は両者の間にあ
って移行期的な特徴を示しているとみられる。

図2は、社会的支援追求の尺度得点の年代別平均値を
示したものである。それによると、動揺はあるが、トレ
ンドとしては年代が高い方が低い水準にあるといえる。
分散分析の結果、年代差は5%水準で有意である ($f(6,775) =$
2.546, $p < 0.05$)。多重比較によると、30代と70
代との間にのみ有意な差があるが、それ以外の年代との

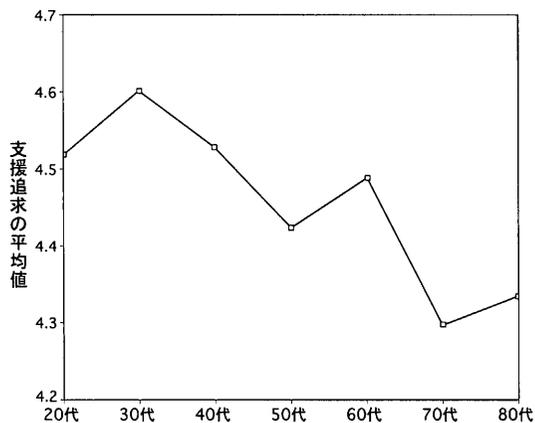


図2 社会的支援追求の年代差

間には有意な差は認められてはいない。したがって、年
代の高い方が社会的支援追求は低い、積極的受容ほど
大きな違いではないといえよう。

図3は、マイペースの尺度得点の年代別平均値を示し
たものである。それによると、20代から50代にかけて減
少し、50代から60代にかけてやや増加し、その後は横ば
いで推移しているように見える。分散分析の結果、年代
差は0.1%水準で有意である ($f(6,807) = 4.417$, $p <$
0.001)。多重比較によると、20代は他の世代(80代を除
く)との差がいずれも有意であった。したがって、20代
は他の世代に比べてマイペース傾向が強いといえよう。

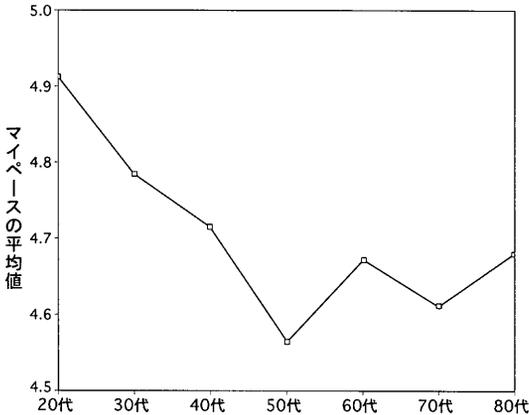


図3 マイペースの年代差

30代、40代もマイペース傾向が強いように見えるが、統計的には50代以降とそれほど大きな違いがあるわけではない。

3 親の世話に対する態度と親が一人で生活することが困難になった場合の対応との関連

図4は、積極的受容と自分の親が一人で生活することが困難になった場合の対応との関連を示したものである。「同居で世話をする」や「通いで世話をする」に比べて「人を雇って世話をしてもらう」や「施設に入れて世話をしてもらう」は積極的受容の水準が低い。分散分析の結果、0.1%水準の有意差が認められた ($f(3,759) = 7.406, p < 0.001$)。多重比較によると「施設に入れて世話をしてもらう」と「同居で世話をする」や「通いで

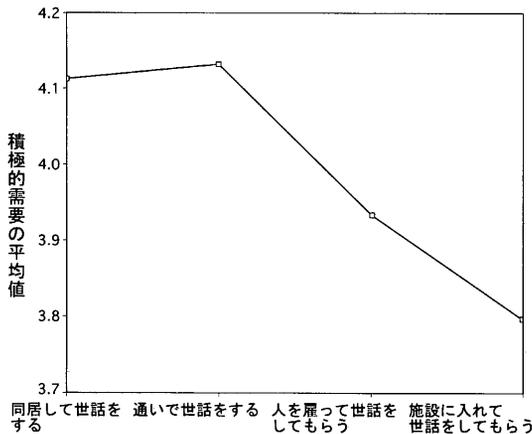


図4 積極的受容と自分の親が一人で生活することが困難になった場合の対応との関連

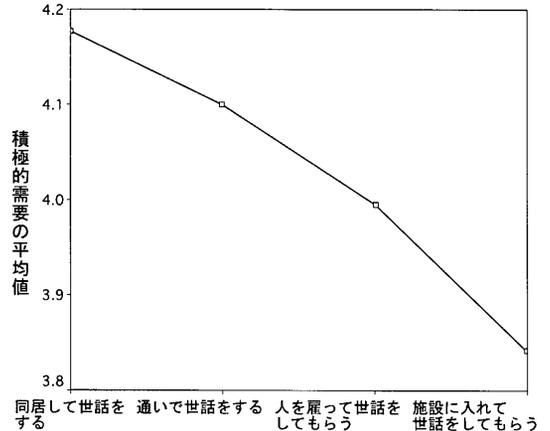


図5 積極的受容と夫の親が一人で生活することが困難になった場合の対応との関連

世話をする」との間には有意な差があるが、「施設に入れて世話をしてもらう」と「人を雇って世話をしてもらう」との間には有意な差が認められなかった。

図5は、同様に積極的受容と夫の親が一人で生活することが困難になった場合の対応との関連を示したものである。「同居で世話をする」がもっとも高く、「通いで世話をする」、「人を雇って世話をしてもらう」、「施設に入れて世話をしてもらう」の順に低くなる。分散分析の結果、0.1%水準の有意差が認められた ($f(3,706) = 7.220, p < 0.001$)。多重比較の結果は、自分の親の場合とまったく同様であった。

図6は、社会的支援追求と自分の親が一人で生活することが困難になった場合の対応との関連を示したものである。「同居で世話をする」が他の対応に比して低い。

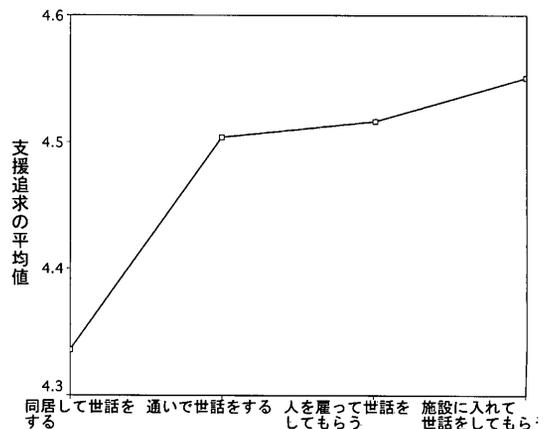


図6 社会的支援追求と自分の親が一人で生活することが困難になった場合の対応との関連

分散分析の結果、5%水準の有意差が認められた ($f(3,768) = 3.561, p < 0.05$)。多重比較によると「同居で世話をする」と「通いで世話をする」や「施設に入れて世話をしてもらう」との間には有意な差が認められた。しかし、「同居で世話をする」と「人を雇って世話をしてもらう」との間には有意な差が認められなかった。

図7は、同様に社会的支援追求と夫の親が一人で生活することが困難になった場合の対応との関連を示したものである。「施設に入れて世話をしてもらう」が高く、「人を雇って世話をしてもらう」がそれに次、「同居で世話をする」や「通いで世話をする」は低い。分散分析の

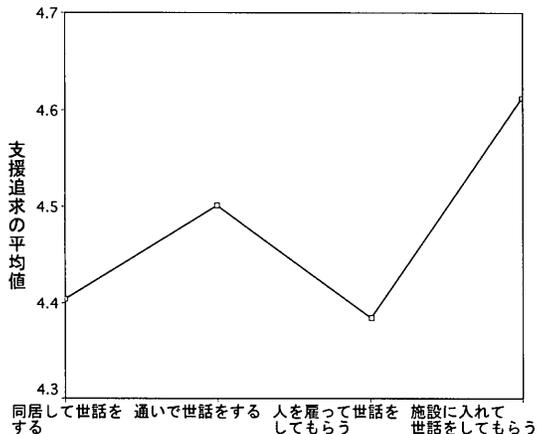


図7 社会的支援追求と夫の親が一人で生活することが困難になった場合の対応との関連

結果、5%水準の有意差が認められた ($f(3,716) = 3.401, p < 0.05$)。多重比較の結果は、「同居で世話をする」と「施設に入れて世話をしてもらう」との差のみ有意であった。

なお、マイペースと自分ないし夫の親が一人で生活することが困難になった場合の対応との関連はいずれも統計的には有意にいたらなかった。

考 察

親の世話に対する態度の因子は、岡林・他(1999)が使用した16項目を中心とする28項目の因子分析から抽出された。したがって、本研究の親の世話に対する態度の因子は岡林らが抽出した因子とはそれなりに違うものかなり似ているところがある。第1因子の積極的受容は岡林らが抽出した積極的受容の因子に負荷の高い項目がベースになっており、本研究においても一応、同様の命

名を行った。しかし、岡林らにない「私は、親のためならなんでもしたい(なんでもできる)」が負荷のトップ、「私は、自分のことより親のことを考えてしまう」が負荷4位、「私にとって、親の世話は生きがいである」が負荷5位になっている。したがって、本研究の積極的受容の因子には、親孝行至上主義的な側面がかなり含まれているとみられる。

第2因子の社会的支援追求は、岡林らの公的支援追求の因子に負荷の高い項目がベースになっている。本研究ではこの因子を社会的支援追求と命名した。ただし、因子分析を繰り返し項目を減少させる過程で、この因子は「親を大切にしたい気持ちと、実際に介護を要求されるとちょっと困る気持ちがある」や「自分自身、老いてくる親の世話をするのは、体力的にも経済的にもつらいと思う」などの葛藤する気持ちとの関連が示唆された。また、「お世話している人同士で励ましあう」や「お世話にまつわる苦労や悩みを家族や周りの人に聞いてもらう」など岡林らの私的支援追求の因子に負荷の高い項目との関連も示唆された。

第3因子のマイペースは、岡林らのペース配分の因子および気分転換の因子に負荷の高い項目がそれぞれ含まれており、両因子が融合されたものとみることができる。因子間相関によると、積極的受容は他の社会的支援追求やマイペースとは相関が低く、親の世話への積極性を問う根幹となる因子であると考えられる。しかし、親の世話を持続的に行うには、積極的な気持ちだけでは無理があり、実際的な対応を考えた場合の姿勢として、社会的支援追求とマイペースという二つの因子が抽出されていると考えられる。また、この二つの因子は互いにかなり相関しているが、実際、マイペースが保証されるためには社会的支援が必要であり、両者の密接な関係が示されているといえる。

年代差については、まずは、60代以上に比べて40代以前は積極的受容が低いことが注目される。こうした親の世話の積極的受容の気持ち、実際、加齢により高まってくる可能性も否定はできないが、それ以上に、生まれ育った時代的環境の違いが影響しているのではあるまいか。60代以上は戦前生まれが多く、戦後生まれに比べて、親孝行重視の生育環境にあり、親孝行至上主義的価値観が優位であるように思われる。また、50代が移行期的特徴を示したのは、50代の生育環境が戦前の古い生育環境から戦後の対等独立の人格者同士の関係が重視されてく

る新しい生育環境への転換期にあたるためと推察される。

また、30代と70代との間で、社会的支援追求で明確な年代差がみられた。70代は加齢により健康・体力や経済力などの面で低下してくるため、年代の高い方が老老介護など社会的支援追求の姿勢が強まることも予想されたが、結果は、むしろ逆であった。これについては、ひとつには、そうした不安をもつのはむしろ若い世代で、年代の高い方は、日常生活に特に支障がない場合は自分の加齢のことは意外と気にしていないのかもしれないということである。もうひとつは、これも時代的環境の影響で、70代以前の戦前の教育を受けた人のなかには、社会的支援を受けることをよしとしない考え方や世間体を意識する風潮が残っているのかもしれないということである。

20代は他の年代と比べてマイペース傾向が強いが、これは20代が独身者が多く（およそ7割が未婚）、現在、ペース配分や気分転換などマイペースの生活を謳歌しており、将来もそうした生活を維持したいという願望が強く反映されているためと考えられる。それに対して、50代が最低なのは、親の世話を大なり小なり経験する中で、年代的にむやみにペース配分や気分転換を追求する状況にないことをよくわかっているためではないだろうか。

親の世話に対する態度は、親の一人暮らしが困難になった場合の対応と関連していることが明らかとなった。「同居で世話をする」や「通いで世話をする」は「施設に入れて世話をしてもらう」に比べて親の世話を積極的に受容する態度が明らかに高い。「人を雇って世話をしてもらう」はちょうどその中間的な位置にあることが示された。しかも、親が自分の親であれ、夫の親であれ、その対応は変わらないということが示された。しかし、親の一人暮らしが困難になった場合の対応如何で、親の世話に対する態度が問われるということになると、それがストレスの種になる恐れもある。世の中には、親の世話に対する気持ちとはかかわりなく、諸般の事情から現実的に様々に対応せざるをえないことが少なくないため、現実の対応に対してはさらなる慎重な解釈が必要である。

また、社会的支援追求についてみると、自分の親の場合、「同居で世話をする」は「通いで世話をする」や「人を雇って世話をする」、「施設に入れて世話をしてもらう」に比べて社会的支援追求が低い。このことは、同居の場合はそれだけ社会的支援追求が低くても親を世話できる状況にあることを示しているともみることができる。

また、自分の親の場合も夫の親の場合にも、「同居で世話をする」と「人を雇って世話をする」との間には明確な差はなかった。このことは、同居で世話をする在宅介護の場合にも、ヘルパーや看護師などの社会的支援を必要とする場合が多々あり、「同居で世話をする」と「人を雇って世話をする」とを排他的に区別しがたい面があったことを示している。とくに、夫の親の場合には、「同居で世話をする」と「人を雇って世話をする」はほとんど差がなく、そのことが影響しているとみられる。

付記 本論文は、東京家政大学大学院共同研究の一環として実施されたものである。

引用文献

- 春日井典子 1997 ライフコースと親子関係 行路社
北村琴美・無藤隆 2001 成人の娘の心理的適応と母娘関係：娘の結婚・出産というライフイベントに着目して 発達心理学研究, 12 (1), 46-57.
北村琴美・無藤隆 2002 成人の娘とその母親における相互間サポート 日本発達心理学会13回退会論文集, P231.
水野一島谷いずみ 2002 日本における成人期の母娘関係の概念的枠組みと測定尺度—都市在住の女性を対象とした分析— 社会心理学研究, 18, 25-38.
岡林秀樹・杉澤秀博・高梨薫・中谷陽明・柴田博 1999 在宅障害高齢者の主介護者における対処方略の構造と燃えつきへの効果 心理学研究, 69, 486-493.
島谷いずみ 1999 日本の成人期の母娘関係 東京大学大学院修士論文
菅谷よし子・長山晃子 1987 第IV章 ライフコースの日米比較 4 家族の世代比較—接触関係と情緒関係—, 現代日本人のライフコース (PP. 344-361) 森岡清美・青井和夫 (編) 日本学術振興会
東京都生活文化局 (編) 1995 東京女性白書 東京都生活文化局女性青少年部計画課
東京都生活文化局 (編) 1998 東京女性白書 東京都生活文化局女性青少年部計画課
東京都福祉局総務部計画調整課 2001 高齢者の生活実態 平成12年度東京都社会福祉基礎調査報告書 (統計編) 東京都福祉局総務部計画調整課

Abstract

In this study, we examined the factor structure and generation gap pertaining to attitudes towards the care of parents by adult women. We also examined the relationships between attitudes towards the care of parents and how to deal with a parent who is unable to carry on living on his or her own. The subjects of the survey are 979 females varying in age from the 20s to the 80s. A postal survey was carried out by 4,200 fellow students of a women's university (including a junior college and a special high school under the old system) in the Tokyo Metropolitan area, and the recovery ratio was 23%. This study has been carried out as a part of a life-span development psychological study of the relationship between parents and their children. The questionnaire sheets of the survey contain 265 items such as lifestyle in old age, the relationship between spouses, the affectionate relationship between parents and their children, face sheet, etc. in addition to the care of aging parents.

Three factors of positive acceptance, pursuit of social support, and 'my pace' were abstracted, concerning the attitudes towards care of parents by a factor analysis. The result of an analysis of variance shows that positive acceptance is less in the 60s and older than in the 40s and younger. Pursuit of social support is greater in the 30s than in the 70s. 'My pace' is greater in the 20s than in the other age groups. In addition, the results indicated that positive acceptance and pursuit of social support were related to how to deal with their parent where it had become difficult for that parent to carry on living on his or her own, that is to say, what measure would be chosen from "I will live together with the parent and take care of him or her", "I will take care of the parent by visiting him or her", "I will employ a person and have the person take care of the parent" and "I will send the parent to a home for the elderly and have the home take care of the parent".